

# ダイクシスの中心をなす日本的自己

廣瀬幸生・長谷川葉子

(ひろせ ゆきお・はせがわ ようこ)

## 1 はじめに

「日本語のダイクシスの基点は、『ウチ』という集団であり、印欧語の一人称単数代名詞で表現される『個』ではない」という考え方は、いわゆる日本人論において、日本人を集団主義的と捉える集団モデルを支える根拠として広く受け入れられている（荒木 1973, Bachnik 1994, Wetzel 1994, 牧野 1996 など）。この通説によれば、「ダイクシスの中心をなす日本的自己」とは、集団的なウチに同化し、状況に応じて変化する「相対的自己」となる。

しかし、一方で、日本語にはウチに同化しない「絶対的自己」を認めざるを得ない現象もある。さらに、絶対的自己には（後述する）「私的自己」と「公的自己」という二つの側面があることを示す現象もある。

本稿では、日本語に反映される自己概念が一枚岩ではなく、複合的なものであることを論じるとともに、どの自己概念がよりダイクシスの中心と言えるかを考察する。その結果、集団モデルの日本語観に反し、相対的自己よりは絶対的自己が、公的自己よりは私的自己が優先されることを示す。

## 2 相対的自己

集団モデルの相対的自己を動機づける根拠としては、第一に、日本語の一人称代名詞の欠如があげられる。日本語には英語の I に当たる代名詞がないので、聞き手や状況に応じて、「僕」「私」「お父さん」「お婆さん」「先生」などのことばを使い分ける。これは日本人の自己意識が状況依存的であることを示す証拠とされる。

第二に、親族指示語の使い分けがある。たとえば、自分の母親を指すのに、身内との会話では「お母さん」を使い、ソ

トに対しては「母」を使う。このような使い分けは、人間関係の表現がウチ・ソトに応じて状況依存的であることを示すものだと考えられる。

第三に、ウチ・ソトに基づく自己意識の流動性を示す例として、授与動詞の用法があげられる。日本語では英語の give を「くれる」と「やる・あげる」の二つに区別する。「くれる」は、通例、(1)のように話し手が受け手の場合に使われ、(2)の「あの見知らぬ人」のようにソトの者が受け手の場合は容認されない。しかし、受け手が話し手によってウチの者と見なされる場合は、(3)のように容認される。

(1) 岡田さんが私にお金を貸してくれた。

(2) #岡田さんがあの見知らぬ人にお金を貸してくれた。

(3) 岡田さんが母にお金を貸してくれた。

この種の現象が生じるのは、ウチの者である母は自己の延長であり、まさに、自己と他者の境界が流動的だからであると説明される。

第四に、尊敬語と謙譲語の使い分けにもウチ・ソトに関わる自己の流動性が見られ、この現象は「相対敬語」とも呼ばれる。たとえば、自分の会社の社長について同僚と話す場合は、「社長は出席なさいます」のように尊敬語を用い、自分の行動を話す場合は、「私は出席いたします」のように謙譲語を用いる。しかし、会話の相手が社外の人である場合は、社長（名前を田中とする）について話すときでも謙譲語を用いて「田中は出席いたします」と言わなければならない。これは、ソトの者との会話では、話し手はウチを代表し、話題の人物が上司であってもウチの者であるかぎりには自己の延長だと見なされるからだと説明される。以上が相対的自己を認める主な言語的根拠である。

### 3 絶対的自己

日本語には、相対的自己とは異なり、ウチに同化しない絶対的な自己を認めざる得ない文法現象もある。その代表的なものが心理述語の使用制限である。心理述語とは感覚・感情

などの心理状態を記述する動詞・形容詞で、日本語文法でよく指摘されるように、心理述語の主語は話し手に限られる。したがって、心理述語を使用するには、日本語話者は自己と他者の間の厳密な区別を自覚しなければならない。

たとえば、(4)では、心理述語「うれしい」の主語は話し手であり、話し手以外の心理を描写する場合、(4b)は容認されず、(4c)に示すように「～がっている・そうだ」のような間接的表現を付け加えなければならない。

- (4) a 私はうれしい。
- b #母はうれしい。
- c 母はうれし {がっている／そうだ}。

「～たい」で願望を表す表現についても同様である。

- (5) a 私は少し休みたい。
- b #母は少し休みたい。
- c 母は少し休みたがっている。

さらに、(6)の「思う」も一種の心理動詞であり、他者が主語にはなれない。(6a)では、「思う」の主語は話し手、「病気だ」の主語は話し手の母親である。(6b)では、「私」は現れていないが、解釈は(6a)と同じで、「思う」の主語は話し手である。他者の思いを述べるには、(6c)のように「思っている」と言う必要がある。

- (6) a 私は、母は病気だと思う。
- b 母は病気だと思う。
- c 母は（自分は）病気だと思っている。

このような現象は、話し手は自己以外の他者の心理を直接知ることはできないという一般的認知制約が言語に反映されたものであり、ウチの代表例である母親も他者扱いされる。つまり、心理述語の文法は一定不変の絶対的な自己意識を前提とするわけである。

#### 4 ダイクシスの中心としての絶対的自己

では、相対的自己と絶対的自己とではどちらが優先されるのだろうか。以下では、集団モデルの通説とは逆に、絶対的

自己の優位性を示す論拠をあげる。

第一に、絶対的自己の意識は言語習得の早期に現れ自然に獲得されるが、相対的自己の概念獲得はかなり後になるという事実がある。たとえば、知り合いの小学一年生に「あきちゃんはくるとおもう」という文の意味を尋ねたところ、「くる」のはあきちゃん、「おもう」のは自分だと容易に答えた。一方、その子供の使用語彙には「お母さん」はあるが、「母」はなかった。つまり、心理述語の文法は自然に身につくのに対し、親族指示語の使い分けは教育の場などで意識的に教えないと身につかないのである。尊敬語と謙譲語の使い分けも同様で、多くの会社が新入社員教育の一環として相対敬語使用法を教えているのは周知の事実である。

第二に、心理述語の制約は日本語一般に当てはまるのに対し、ウチ・ソトの区別は日本語の方言すべてに共通するわけではない。相対敬語は、平安時代における「宮廷社会の最高部の人々の間で成立した」（西田 1998:74）ものであり、加藤 (1974) が指摘するように、日本の多くの方言には見られない。また授与動詞についても、日高 (1997) が調査しているように、「やる」と「くれる」を区別せず、どちらも「くれる」で表す方言が多く存在する。たとえば、富山県の五箇山方言では、共通語で「やる」を用いるところを、「くれる」を用いて次のように言う（日高 (1994) 参照）。

(7) a ソンナモン、アノコニ クレヨ。(そんな物、あの子にやれよ。)

b コノホン、オマエラチ キョーダイノウチノ ダレカニ クリョー。(この本、おまえたち兄弟のうちの誰かにやろう。)

したがって、これらの方言では、相対的自己の概念は授与動詞の用法には関与しない。

第三に、相対的自己より絶対的自己の方がダイクシスの中心であると言える現象がある。たとえば、(8)の例では、相対的自己を許す「くれる」と絶対的自己を要求する「思う」が同一文内に生じている。相対的自己の「母」は「送ってくれ

る」の目的語、つまり恩恵の受け手であり、「思う」の主語は絶対的自己の話し手である。

(8) (私は) 母は岡田さんが家まで送ってくれると思う。  
この文にダイクシス動詞の「くる」を入れると(9)になる。

(9) (私は) 母は岡田さんが家まで送ってきてくれると思う。

議論の都合上、(9)の話し手とその母親は別々の家に住んでいると仮定する。「くる」は移動の着点に視点をおき、それは、通常、話し手のいる場所である。したがって、(9)の「家」は、普通、話し手の家と解釈される。ただし、特別な状況では、その「家」を母親の家と解釈することも可能である。しかし、その場合は、①話し手が母親の家を自分の領域と見なしているか、あるいは、②母親の到着時に話し手がその家にいることが不可欠となる。②の解釈は、次の(10)の場合と平行的である。

(10) ジョンが今晚6時にそこに{来ます/\*行きます}の  
で、私が先に行って待っています。(大江 1975)

そして、①あるいは②のいずれでもない場合は、(11)に示すように、「くる」ではなく「いく」が用いられる。

(11) (私は) 母は岡田さんが家まで送っていってくれる  
と思う。

つまり、(9)と(11)で「くる・いく」の選択を決定しているのは絶対的自己であって、相対的自己ではない。このことから、絶対的自己の方が相対的自己よりダイクシスの中心にあるということが言える。

## 5 絶対的自己の二面性—公的自己と私的自己

絶対的自己とは、当該言語表現を用いる言語主体としての自己であり、したがって、あらゆる言語に適用可能な普遍的概念である。しかし、このように普遍的に自己を規定したとしても、集団モデルの立場からは、一人称代名詞の欠如があるかぎり、日本語の自己は印欧語のような不変の自己とは言えないという反論が起こる。つまり、日本語に英語の I のよ

うな一人称代名詞がないのは、個としての自己意識の欠如の現われではないかという議論である。しかし、これは話し手という概念を一面的にしか捉えていない、片寄った見方であると言えよう。

話し手の絶対的自己には、「公的自己」と「私的自己」という二つの側面がある。公的自己とは聞き手と対峙する伝達の主体としての側面であり、私的自己とは聞き手を想定しない思考・意識の主体としての側面である。公的自己・私的自己は「公的表現・私的表現」という異なるレベルの言語表現の主体となる。公的表現とは、言語の伝達的機能に対応する言語表現で、一方、私的表現とは、伝達を目的としない、言語の思考表示機能に対応する言語表現である。公的表現と私的表現の根本的な違いは、前者は聞き手の存在を前提とするが、後者は前提としないということである。

私的自己と公的自己に関して、日英語には次のような違いがある。日本語には私的自己を表す固有のことばとして「自分」があるが、公的自己を表す固有のことばはないため、誰が誰に話すかという発話の場面要因に左右される様々なことば（「僕・私」「お父さん」「おばさん」「先生」など）が使用される。一方、英語には公的自己を表す固有のことばとして I があるが、私的自己を表す固有のことばはないため、当該私的表現が誰のものか、つまり、一人称のものか、二人称のものか、三人称のものかにより、本来、公的な人称代名詞が私的自己を表すのにも転用される。

この日英語の違いは、特に間接話法の文法に顕著に反映される。日英語とも、直接話法は公的表現の引用であるのに対し、間接話法は私的表現の引用である（詳細は廣瀬・長谷川(2001)や Hasegawa & Hirose (2005)を参照）。日本語には私的自己固有の「自分」があるので、話し手が誰であっても、その私的自己は「自分」で表すことができる。したがって、(12)のような間接話法において「自分」はいかなる人称でも一定不変である。

(12) {私/あなた/あの人} は、自分はどううれしいと言った。

先に見た(4)では、心理述語「うれしい」の主語である絶対的  
自己が公的自己表現の「私」であるのに対し、(12)では私的  
自己表現の「自分」である点に注意されたい。一方、英語に  
は、日本語の「自分」にあたる私的自己固有のことばはない  
ので、(13)のように私的自己は人称に応じて変化すること  
になる。

(13) {I/You/That man} said {I was/you were/he was} happy.

このように私的表現を考察すると、英語では自己を表す語  
が変化するのに対し、日本語では「自分」という語で一定し  
ている。これは、英語の I がいかなる話者も指せる不変表現  
であるのと平行的な特徴である。ただし、英語の I は公的自  
己を表すのに対し、日本語の「自分」は私的自己を表す点で  
異なるのである。

## 6 ダイクシスの中心としての私的自己

では、私的自己と公的自己とではどちらがダイクシスの基  
点となるのだろうか。自己と他者の比較の場合は、言うま  
でもなく、自己がダイクシスの基点である。たとえば、(14)  
では、他者の「秋男」が恩恵の与え手で、自己の「僕」が恩  
恵の受け手なので、ダイクシスの基点は恩恵の受け手でな  
ければならない。これに合致するのは、受け手に視点をお  
く「くれる」であり、与え手に視点をおく「やる」ではない。

(14) 秋男が僕にお金を貸して {くれた/\*やった}。

このことを念頭におき、次の例を見てみよう。

(15) 秋男は、自分が僕にお金を貸して {\*くれた/やった}  
と言っている。

興味深いことに、(14)と(15)では「くれる・やる」の容認可  
能性が逆である。(15)は、秋男の発言を私的表現で記述した間  
接話法であり、引用節中の「自分」は秋男の私的自己を指し、  
「僕」は秋男の発言を伝える話し手の公的自己を指す。この  
場合、「くれた」でなく「やった」が選ばれることから、受け  
手の「僕(公的自己)」ではなく、与え手の「自分=秋男(私  
的自己)」に視点がおかれている。ということは、公的自己と

私的自己とでは、私的自己の方がよりダイクシスの中心になるということである。

しかしながら、これは日本語に固有の特徴ではない。たとえば、大江 (1975)からの例(16)(17)について考えてみよう。

(16) John<sub>i</sub> told Mary that I would {come/\*go} to his<sub>i</sub> party.

(17) John said to Mary, “He [= speaker] will {come/\*go} to my party.”

(16)は間接話法、(17)は直接話法で、(17)の He は文全体の話し手を指す。(16)の間接引用節で his は John の私的自己を指し、I は John の発言を伝える話し手の公的自己である。英語の come/go の対立については、概略、come は移動の着点に視点がある場合に、go は視点が移動の起点にある場合（あるいは中立的な場合）に用いられる。(16)では、go でなく come が選ばれることから、起点側の I（公的自己）ではなく、着点側の his (party)（私的自己）に視点がおかれていると解釈できる。すなわち、英語でも私的自己の方が公的自己よりもダイクシスにおいて優先されると言えるのである。

## 7 おわりに

本稿では、集団モデルの提唱する相対的自己を出発点として、日本語ダイクシスの基点となる自己についての考察を行った。まず、相対的自己よりは絶対的自己が優先されることを示し、さらに、絶対的自己には私的自己和公的自己の二側面があることを論じた。そして、ダイクシスに関しては、公的自己より私的自己の方が優位に立つことを明らかにするとともに、私的自己在ダイクシスの究極的基点となる現象は、英語にも見られ、決して日本語特有のものではないという結論に達した。

## 引用文献

荒木博之 (1973)『日本人の行動様式—他律と集団の論理』講談社

Bachnik, Jane M.(1994) “Uchi/Soto: Challenging Our



- Conceptualizations of Self, Social Order, and Language”. In Bachnik and Quinn (1994), 3-37.
- Bachnik, Jane M. and Charles J. Quinn, Jr. (eds.) (1994) *Situated Meaning: Inside and Outside in Japanese Self, Society, and Language*. Princeton University Press.
- 牧野成一 (1996)『ウチとソトの言語文化学—文法を文化で切る』アルク
- Hasegawa, Yoko and Yukio Hirose (2005) “What the Japanese Language Tells Us about the Alleged Japanese Relational Self,” *Australian Journal of Linguistics* 25, 219-251.
- 日高水穂 (1994)「越中五箇山方言における授与動詞の体系について—視点性成立過程への一考察」『国語学』176集、14-25頁
- 日高水穂 (1997)「授与動詞の体系変化の地域差—東日本方言の対照から」『国語学』190集、24-35頁
- 廣瀬幸生・長谷川葉子 (2001)「日本語から見た日本人—日本人は『集団主義的』か〈上・下〉」『月刊言語』30巻1号、86-97頁、同2号、86-96頁
- 加藤正信 (1974)「全国方言の敬語」『敬語講座6 現代の敬語』25-83頁、明治書院
- 西田直敏 (1998)『日本人の敬語生活史』翰林書房
- 大江三郎『日英語の比較研究—主観性をめぐって』南雲堂
- Wetzel, Patricia J. (1994) “A Movable Self: The Linguistic Indexing of *Uchi* and *Soto*”. In Bachnik and Quinn (1994), 73-87.
- 廣瀬幸生 (筑波大学／言語学)
- 長谷川葉子 (カリフォルニア大学バークレー校／言語学)